

高等学校社会科地理における都市の学習指導について

— 都市化の概念とその形成 —

高 山 直 子

第1章 序論 目的と方法

本研究の目的は、高等学校の地理教育における地理的事象の多面的理解の必要性和、段階的な学習法の重要性について考察することである。

高等学校における地理の学習内容は、多岐にわたっており、内容も豊富である。しかしながら、例えば、現行の地理A（系統地理）の内容をみると、それぞれの内容の位置づけや取りあげ方、あるいは教授法などの点でさまざまな問題を含んでいる。特に「都市と村落」という単元は古くから地理の教材として取りあげられてきたにもかかわらず、その位置づけが不明確であると同時に、内容の取りあげ方、あるいは、内容そのものの概念に致るまで一様でなく、最も問題の多い分野のひとつとなっている。特に「村落」よりも「都市」において、その傾向は顕著である。それは都市そのものが持つ、複雑性・多様性・多面性・現代性などに由来するものと考えられる。従って、都市に代表されるこのような側面をもった地理的事象を扱う場合には、いきおい合理的な学習法を考えることが必要とされる。

そこで、本研究では複雑で、多様で、多面的で、現代的な、地理的事象を学習する際の方法を探るために、「都市」を学習内容として例に取りあげ、考察を進める。実際に学習指導計画を作成する前に、小学校から高等学校に致るまでの地理的内容の取りあげ方を概観し、問題点を探ることから始めなければならない。それは小学校からの一連の社会科教育の実態を確認することによって、高等学校における地理教育の役割と特殊性を確認したうえで、指導計画をたてる必要があるからである。（第2章）

それをふまえて「都市」の学習に関する指導計画を作成して提案する。そこでは、特に地理的事象の多面的理解の必要性和段階的な学習法の重要性を考慮に入れて、計画した。（第3章）

さらに、その計画に沿って高等学校で実際に実験授業を行い、その授業内容を評価するとともに、授業の前と後でそれぞれテストを実施し授業の効果を分析した。（第4章）

以上のプロセスを経て、提案された指導計画が有意義であったかどうかを考察するとともに、その実施上の問題点を指摘し、本研究の所期の目的を達成することを試みるのが本研究の課題となっている。

第2章 地理教育における都市の扱い方

地理教育の中心は、学校教育における地理であり、ここでは特に高等学校の地理教育について主として考察した。高等学校で行われている地理教育は当然のことであるが、小学校・中学校の学習を基礎とする。故に、高等学校における地理教育を考える際には、小学校・中学校社会科の課程とその内容を考察する必要がある。そこで、小学校・中学校社会科における都市の扱い方を概観したうえで、高等学校社会科における都市の扱い方を考察することにした。

小学校における「都市」は「まち」であって、機能的連関によって形成される空間構造を持ち、他の地域と多様に結合し、それ自体が複雑な組織をもつ「都市」ではなく、人々の生活の場を提供する受け皿としての「都市－まち」が扱われているのである。

中学校社会科における「都市」はどのように扱われているかを見てみると、二つの分野で都市というものを扱っている。地理的分野と公民的分野である。地理的分野においては、都市に関する諸概念が明らかにされないうまま、単に「都市」とはこういうものであるという、イメージを持たせるだけで地理学習を終わることになる。すなわち、ここでは各地方の地誌的な学習内容の中で前後の脈絡もなく、非体系的に取り扱われるにすぎなく、都市に生じる現象面だけを理解するにとどまっている。これに対して公民的分野の学習では、別の角度から都市というものを扱っている。ここではやはり、都市というものの明確な概念の規定はなされていないものの、例えば「都市化」とか「都市問題」といった都市と直接関係があるというより、むしろ現代の都市がもつ特徴の一側面を正面から取り上げている。特に「都市化」に関しては、ほとんどの教科書がかなり大きく扱っており、そこでは都市の平面的拡がりや機能的連関といった地理的基本的事項をふまえた上で都市化による生活の変化、社会的意識の変容やそこに存在する問題点等について学習を展開している。

しかし、ここで問題となるのはやはり「都市」そのもの、より限定していえば都市の空間的諸現象に関する知識の欠如である。公民的分野で都市のもつ様々な社会現象に関する知識が教育されたとしても、それが生起している空間的基盤としての地域、すなわち都市に関する基本的認識が欠けていれば、それは公民的分野での学習効果を半減させることになると思われる。また、この基本的認識の授与は中等社会科教育の地理的分野に課せられている、重要な課題のひとつであると思う。

高等学校社会科における都市の扱い方について、次に考察をすることにする。現行の学習指導要領では、地理Aで都市は取り扱われることになっている。そこで、地理Aの教科書(8社9種類)の比較分析から、若干の検討を加えた。都市に関する記述の分量をページ数で示したものが第1表である。これによると都市関係(村落を含む)にさかれているページ数は16~38

ページで、少ないところと多いところでは2倍以上の差がある。また、その全体に占める割合を調べてみると、6%~15%までの差がある。しかし、概ね紙数全体の1割前後が都市関係に使用されていることがわかる。次に、教科書において都市化という言葉がどのように扱われているかを調べてみることにする。本研究においては、後章で詳述するように実験授業を行ったが、そこでは特に都市化に関する諸問題を扱った。都市化の概念は地理学においてもさまざまな見解がある。その影響が教科書にも現われている。それらのようすをまとめたものが第2表である。まず、都市化の概念規定についてであるが明確な概念規定を呈示してあるものには

第1表 「都市」の分量

教科書	都市関係 ページ	全体ページ	その割合(%)
1	28	247	11
2	34	255	13
3	21	263	8
4	27	277	10
5	33	245	13
6	21	215	10
7	28	277	10
8	16	263	6
9	38	259	15

第2表 都市化の概念規定

教科書	概念規定
1	○
2	×
3	○
4	○
5	×
6	×
7	×
8	○
9	○

○印をつけた。なされていないもの、あるいは都市化に関する諸現象は述べてあるが、明確な形で概念規定していないものは×印とした。都市化の概念規定が明確である教科書においてもその内容は一定していない。内容についてさらに詳しく分析したものが、第3表にまとめられている。都市化に関する内容、特に都市化とはどういうものかという概念規定に直接関係のある部分をどういふ観点から説明しているかを調べたものである。これによると、人口の観点、

第3表 都市化の説明要素

教科書	人口	土地利用 市街地	生活様式	その他
1	○	×	×	
2	○	○	×	
3	○	○	○	農村的性格と 都市的性格
4	×	○	×	
5	○	○	×	文化
6	○	×	×	
7	○	×	×	
8	○	×	×	
9	○	○	○	

土地利用の変化や市街地の拡大の観点が多く、生活様式の変化やその他の事象を大きく取り上げているものは少ない。高等学校の地理教育における都市の扱いは小学校・中学校と異なり都市そのものを主題として扱っているが、内容の取り上げ方は各教科書で一様でなく、都市化に関しての概念規定は曖昧になっている。

都市は、人類の居住空間における具体的かつ重要な構成要素である。そのため、地理的な見方、考え方を養うためには格好の材料のひとつである。しかしながら、都市の扱いは多様性を帯びている。それは都市の持つ複雑さと多様性に由来するものである。当然のことながら、都市の扱いは多様性、柔軟性をもってよいが、以下のことが最低限考慮されなければならない。①都市を地理教育のいかなる基本理念に基づいて教授するか。②都市を地理教育の全体計画のどこに位置づけるのか。③他の教科（公民・歴史など）とどのように関連させて展開すべきか。④都市の多様な事象のなかから、どのような事象を抽出し解説すべきか。⑤その抽出した内容をいかなる観点から説明すべきか。⑥その説明を効果的にするため、いかなる関連事項を解説すべきか。⑦その結果、生徒に形成された都市像をいかにして他に応用できる形にして理解させるか。このように都市は地理教育における重要な教材である。

第3章 高等学校地理における都市に関する指導計画

高等学校地理における都市の指導目標は、①都市に関する基本的事項の理解を深め、多方面にわたる学習の基礎を与える。②都市の学習を通じて、さまざまな地理的条件を認識させ他の地理的事象を考察する際の基盤を与える。③都市が内包するさまざまな事象に気付かせ、他の社会的現象との関係に気付かせる。④都市の学習を通じて、地域に対する地理的な見方、考え方を養成する。⑤都市がもつ多様な側面を認識させ、さまざまな観点から総合的に都市を理解する力を養う。⑥現代の都市がもつ基本的な特色を理解させ、都市が現在直面しているさまざまな問題を身近なものとし、その問題の本質の探究を通じて、その解決の方途をさぐる態度を身につけさせる；とし、これに基づいて指導計画を作成し第4表の如く示した。指導の手順としては都市を学習する場合に示された内容をただ羅列的に教授するのではなく、まず都市に関して具体的なものの考察をし（生徒の認識の段階としては、直接的・経験的理解の段階）、次の段階でそれによって得られた諸現象の具体的事実の理解を基盤として、それを一般化した形、すなわち理論的側面から学習する（生徒の認識段階としては、理論的な段階）という、一連のプロセスである。この学習方法を実行するにあたって、まず考慮しなければならないのは、その導入部で扱う具体的事象の選択である。本研究ではどこの都市を具体的事象に選ぶかという問題である。都市の選択には2つの条件を考えなければならない。①生徒がその地域

第4表 「都市」の学習指導計画

時間	テーマ	内 容	事 例 な ど
1	(導 入) 都市の歴史と形態	「都市」とはどんなものか 都市発達史 平面形態 立体形態	日本の都市 (主要) 世界の都市 (主要) 宇都宮市 県内都市
2	都市の分布と立地	世界の都市の分布 日本の都市の分布 関東の都市の分布 自然的立地条件 社会的立地条件	関東の都市
3	都市の機能	都市の中心地機能 都市圏, 商圏, 交通圏 都市機能分類 機能地域 階層構造	宇都宮市 日本の都市 県内の都市 世界の都市
4	都市の地域構造	都市機能の地域分化 都市を中心とした地域構造 等質地域	宇都宮市 東京
5	都市化 I	社会変動 都市人口増加 産業構造の変化 人口増減の地域構造	宇都宮市 東京都市圏
6	都市化 II	土地利用の変化 都市とその周辺の変化 農村の変化 生活や社会の変化	宇都宮市 東京都市圏
7	大都市の発達 都市開発	メガロポリス 都市群 広域行政 ニュートン・都市計画 国土計画と開発	日本の都市群 ヨーロッパの都市群 アメリカの都市群 首都圏 東京・大阪・名古屋・宇都宮市
8	都市問題 総 括	都市環境の変化 農村環境の変化 都市問題と解決法 環境改善 都市の現代的意義 — 統括	宇都宮市 県 内 東 京 日本の都市全般と世界の都市

についての情報量を多く持っていること、②学習しようとする事象がその地域において典型的に出現していること、の2点である。

しかしながら、この2つの条件を満たす地域は現実には少ない。そこで、ここにこれらの条件の最大公約数的地域を選択する必然性が生じることになる。そして、このような地域を選択し、学習させることが他の地域との比較を正確にし、一般化が的確になされ、他の地域への応用がなされると考える。また、その地域を選択することによって、その地域が何らかの役割を持ち、他の地域との関係において広がりを持つ地域でなければならず、最終的には世界的な視点にまで立つことができなければならない。都市を教えるにあたって、そのような地域を吟味して選択しなければならない。

さて、実際にこの考え方を指導計画のなかに盛り込んだものが前掲第4表の右側にある「取り扱う事例」の部分である。ここでは、宇都宮市にある高校へ通学している生徒を対象に想定している。

第4章 実験授業とその結果

第3章における「都市」の指導計画に基づいて、実際に高等学校において地理の授業を実施し「都市」の指導計画の合理性と効果を検証するとともに問題点を探ることを目的としている。本研究のために行った実験授業は、さまざまな条件・対象校・人数・時間数などの制約のもとで行わなければならなかったことは、言うまでもないことである。その限られた条件の中で、この目的を達成するために最も効果的で合理的な実験授業を行うことを考えなければならなかった。

実験授業はまず、都市に関する事前テストを行い、その後実験授業を実施した。実験授業後、ある一定の期間を置いて、事後テストを行い事前テストと事後テストを比較し、その変化を評価することによって、第3章における「都市」に関する指導計画の妥当性、合理性、あるいは問題点を指摘することを試みようとするものである。

実験授業は、昭和55年11月25日から12月22日までの約1カ月の間に互って、栃木県宇都宮市内の普通高校3校の1年生約270人を対象として行った。

実験授業の内容は「都市」の中の「都市化」を扱うことにした。第3章で示した授業計画の全てを実施することは不可能であるため、題材的まとめ、内容の多様性、重要性、現代性、作業学習導入の可能性などの諸点から、その題材だけを取りだして実験しても十分に成果がありうると思われる「都市化」の題材を実際に授業で指導することになった。「都市化」の学習内容は多岐にわたるが、本研究では「都市化の地域的な展開過程」を中心に扱うこと

にした。都市化の地域的な展開過程は、大きく2つに分けて考えることができる。その第1は機能的都市化であって、都市的人口の増加やそれによる地域の産業構造の変化や都市機能集積などである。第2は、景観的都市化であって都市的土地利用への変化や既成の市街地のより高度な土地利用への変化などが含まれる。この立場は、前章にかかげた授業計画にもあらわれている。

実験授業の計画は、第5表に示される。この計画に基づいて授業を実際に行った。

第5表 実験授業の計画

対象：高等学校一年生

時 間	テ ー マ	内 容	作 業 など
1	事前テスト		テ ス ト
2	都市化Ⅰ ・機能的側面 (・景観的側面の一部)	都市の概念「都市的」とは 都市人口の増加 産業構造の変化 都市機能の集積 市街地の面的拡大	(宇都宮市と事例都市と) する 新・旧地図比較 統計から地図・グラフ作成
3	都市化Ⅱ ・景観的側面 ・社会的側面 ・総 括	土地利用の変化 農村の変化 都市周辺地域の変化 都市内部の変化 生活の変化 都市化の概念規定	討 論 統計などの読みとり 読 図 多 角 化 抽 象 化
4	事後テスト		テ ス ト

テスト（事前テストと事後テストは同一問題）の問題は5問で、都市機能の分類に関する問題、都市の特色に関する問題、都市の地域分化に関する問題、都市化と都市開発に題材をとった問題、都市問題に関する問題である。これらの問題を通じ、生徒の都市と都市化に対する認識と理解の程度を探り、授業の前と後で、どのようにそれが変化したかを探ることになる。5問のうち最も注目すべき問題は問題4である。（資料1）事前テストと事後テストを比較してみると、まず1から5までのどこの地点を建設予定地とするかの選択であるが、事前テストでは、地点1を選んだ者1人、地点2が6人、地点13が252人で、全体の93%、地点4が11人、地点5が1人であったのに対し、事後テストでは地点1が0人、地点2が1人、地点3が296人 全体の99%、地点4が1人、地点5が0人というように、ほとんどの生徒が地点3になった。一方、理由についての比較であるが、理由の内容を条件と判断に分類し、1条

件に対して1点、1判断に対して1点というように数量化した。例えば『答：P市に近いので通勤に便利』という文章の場合、P市に近いというのは条件とし1点、通勤に便利というのは判断とし1点、計2点として計算した。数量化されたものの平均点は、事前テストの19.8から、事後テストの26.1へ6.3もの上昇がみられた。1人について6個もの条件もしくは判断の上昇がみられることになる。特に条件の数がかなりふえていた。また、条件だけしか書いてなかったものが、判断まで書くようになった答案も多く見られた。また、同じ条件をあげていても判断が変わったものが少なからずあり、これは立地地点の変化とも関係があると思われる。ただし、事前テストと事後テストとで同一問題を使用したため、なかには事前テストよりも事後テストのほうが、かなり簡略した形で解答したものも多少みられた。この解答をどう評価するかは問題の残るところだが、大筋としては前述した如くとなっている。全体としては、次のような変化がよみとれた。すなわち、①あげられる条件が多くなった。②判断に根拠を示すようになった。③条件が具体的になった。④正しい判断が多くなったということがあげられる。これから判断すれば実験授業の成果は十分にあったのではないかと考えられるのではないだろうか。本研究の目的達成のための有力な根拠を提供することになるであろう。

第5章 結 論

以上、第2章から第4章にわたり本研究の目的である高等学校地理教育における多面的理解の必要性和段階的学習法の重要性を「都市」、特に「都市化」を題材として、考察を進めてきた。その結果と問題点は以下のように要約することができよう。

- ① 具体的事象から入る方法は、特に単元の初めの段階において理解を高め、学習を發展させるうえで、きわめて有効であり無理がない。
- ② 具体的な事例としての地域は、生徒のそれに対する情報量の多少と学習する事象が典型的に発達しているかどうかという点を考慮して、より有効な地域を選ぶべきである。
- ③ 具体的事例学習の後に、翻ってその事象のもつ本質を考えさせ、それを一般化させた形で理解させることは、学習事項を定着させ後の学習を發展させる際の礎石となる。それとともに他の事象をみた時に、本質的な内容を探り、それを見分ける能力を養うことにもなる。ただし、ここでは、しばしば一般化が難しいことがある。また、その一般化の程度はやや高めておく必要がある。
- ④ 基本的事項を学習する際には、特に作業学習を取り入れることが重要である。（ここでは、作業は第4章の実験授業で学習に取り入れた。）しかしながら、その実施には時間的制約がかなり伴う。

⑤ 事象を多角的かつ多面的に見る態度は、特に対象が都市の如く、多様性、複雑性をもっている時には、きわめて重要となってくる。

⑥ 事前テスト、事後テストの内容には問題があり、十分な成果が得られなかった。すなわち、ひとつには、あまりに易しすぎた点、アタッチメント式の問題の評価がしづらい点、授業成果を十分に反映させるような問題の作成がなされていなかった点その原因としてあげられる。しかし、問題4と問題5の結果からは、授業の成果が十分にうかがわれ、地理的諸条件に対する認識能力が高まったことは裏づけることができる。

このような6諸点から「都市」特に「都市化」を対象として地理的事象の多面的理解と段階的な学習法は多くの解決すべき課題を残しながらも十分に効果的な学習法であると判断される。

〔資料 1〕

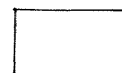
4. 次の文章を読んで下の問いに答えなさい。

いまここに、日本のある地域の略図があります。地図の中で中心都市P市（人口200万人）の成長が著しく、人口の増加が激しいため、新たに人口が2万の住宅団地を一つ建設する必要にせまられてきました。その候補地として1～5の5地点の案が提出されました。

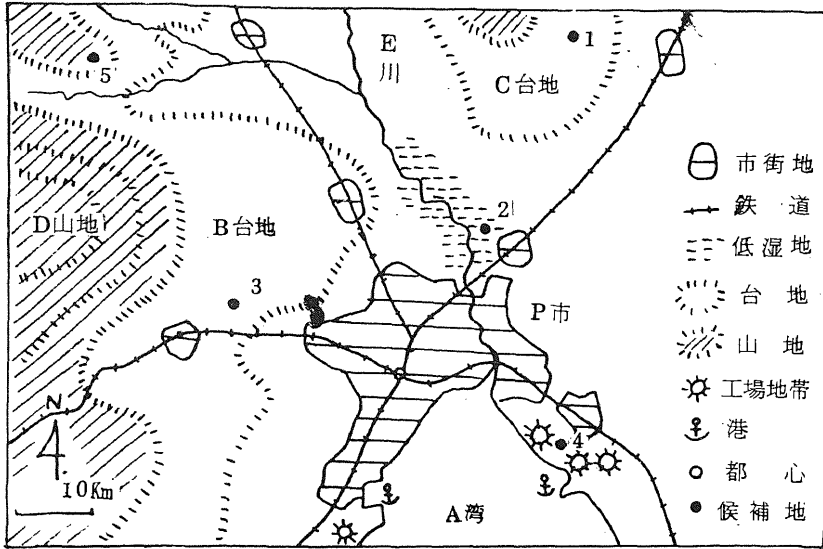
- 住宅団地の居住者の通勤先はほとんどP市の都心である。
- 地図上の条件は住宅団地ができて変わらないものとする。
- その他の条件は、日本の現状から判断する。

問1. 1～5の候補地それぞれの地点について、住宅団地の立地にとって有利な点と不利な点を書けるだけ箇条書きしなさい。答えは、次のページの地図の下の解答欄に記入しなさい。

問2. 問1の結果から、あなたは1～5のうち、どれが最も住宅団地にふさわしい候補地だと思いますか。記号で答えなさい。



4の地図



問1.の解答欄

	有利な点	不利な点
1		
2		
3		
4		
5		